野球部員とその周辺のエトセトラ

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野球部員とその周辺のエトセトラ

【Ｎコード】
Ｎ０１７７Ｓ

【作者名】
鹿の子

【あらすじ】
春の甲子園（センバツ）に選ばれた　野球部のメンバーとその周辺の人々の日常スケッチ。
（ほとんど野球のシーンはありません）
選択可能な１００のお題　使用　。自サイトでも公開中。

人物紹介

「野球部員とその周辺のエトセトラ」の人物紹介です。

人物紹介

綿貫篤志・・野球部　レフト　強打者　高校二年～三年

――

山中・・野球部　ピッチャー　高校二年～三年

――

酒向　覚・・野球部　キャッチャー　高校二年～三年

――

坂井・・篤志のクラスメイト　高校二年～三年

――

綿貫　妹・・篤志の双子の妹　高校二年～三年

――

佐希子・・　高校二年～三年

落ちる5秒前

誰もいない教室で響いていたシャーペンを走らせる音に混じって、階段を二段ずつ上がる音と廊下を早足に歩く音が聞こえてきた。

「それ、度は入ってんの？」

冷たい空気とグラウンドの土のついた野球のユニフォームを着た綿貫君は、教室に入るか入らないかの段階からそんなことを言ってくると、こっちを見もせずまっすぐに自分の席に行き、その机の中をごそごそといじりだした。

「度って。私の眼鏡のこと？」

テキストの上にペンを置くと私はそう言い、そして少しずれてきた眼鏡を手で直した。

「あ、うん。そうそう。前々から坂井って、眼鏡をかけなくてもよく見えていそうな目をしてるって思っていたから」

お、あった、あったと言いながら綿貫君は一冊のノートを取り出した。

「伊達じゃないよ。度は入っているよ。私、視力悪いもの」

「あ、そう。俺はすっげーいいんだ。1・5以上はあるかも」

「へぇ、そうなんだ。いいねぇ」

そう言うと綿貫君はふっと笑った。

もともと私は男子と話すほうではないので、こんな風に綿貫君とも授業以外で話すことはなかったのだけれど。

だからって、綿貫君のことが嫌いだとかそんなんでもなくて。

綿貫君に関して言えば、むしろ「いい人だなぁ」って思うことが多いくらいだった。

綿貫君は、実験のあと片付けを最後までやっているメンバーの一

人でもあったし、授業中も多くの運動部の男子のように寝ていないし（まぁ寝ているのは運動部に限らずだけど）、私語も少ないし。
見かけはでかくてごつい感じの人だけれど、行動に関してはそうじゃないんじゃないかなぁって、私は思っていたから。

「ええと。練習は、おしまい？」
違うって知りながらも間が持たなくて、そんなことを聞いてしまう。
「いやいや、まだまだ」
ノートをぱらぱらと捲りながら綿貫君は、頷いている。
「それ、何のノート？」
そういえばと思って、綿貫君に聞く。
「山中との交換ノート」
そう言うと綿貫君がにやりと笑う。
山中君はピッチャーだ。
ちなみに綿貫君はレフトを守っている。
うちの高校の野球部は強いので、私の様に全く野球とは縁のない人生を歩んでいても、自然とそんな情報が頭の中に入ってくるのだった。

「あ、山中君と仲良しなのね」
男子同士でも交換ノートなんてするのね、なんて思いそう言う。
「それ、冗談だって。ただの物理のノートだって。山中に貸すのは」

「え、ふーん。そうなんだ」
そりゃそうだ。男子どうして交換ノートなんて。
女子だって、交換ノートは小学生の頃で終っていることだし。
そっか、今のは冗談なんだ、なんて思いながら、綿貫君が私なんかにそんな冗談を言ってくるのこの状況って面白いなぁと思った。

さっと風が吹いてきて、それに揺れたカーテンが私の肩に触れた。
換気のために少しだけ窓を開けていたのを忘れていた。
風邪をひきたくないので窓を閉めようと立ち上がり、そのまま校庭に視線を落とした。
夕暮れ時の校庭には誰もいない。
そのがらんとした薄暗い空間に、風に乗って金属バットの音が響いていた。
野球部は少し離れた大グラウンドで練習をしているのだ。
他の部が羨ましいほどの予算をもらっているとの噂だった。
でも、と思う。
もしそうだとしたら、それはそれだけ野球部に期待が寄せられているってこと。
期待には責任が伴う。

「坂井って、あれ。まだ、……大変？」
綿貫君が聞いてくる。
知られたくないことだったけれど、新聞にまで出てしまったから仕方が無い。
父の会社が倒産して、私の今までの生活は一転し、奨学金で勉強する身となっていた。
綿貫君はそのこと訊いてきたのだろう。
確かに最初は、一体これからどうなるのだろうと途方に暮れたけれど、今ではこれも私の人生だと受け止めて、自分で出来る範囲での努力をしているつもりだった。
勉強も、家でやるよりも学校に残ってやっていた。
その方が質問なんかも先生にできるし。

「奨学金って、返すんだろ？」
綿貫君が訊いてくる。

「うん。いずれね。私が社会に出たら働いて返すのよ」
「あぁ、いずれね」
綿貫君が私の言葉を繰り返す。
「坂井って大学に行きたいの？」
綿貫君がそんなことを訊いてきた。
「え？　うん。まぁ」

勉強くらいしかとりえがないから、そこを極めてから就職したいって気持ちはある。
父も最近持ち直してきたから、そこらへんもどうにかなりそうだし。

「大学になったらバイトもできるし。そうそう、綿貫君のお知り合いで勉強でお困りの方がいたら私に紹介してね」
そう私が言うと、「俺の妹が。でも、俺らと同じ年か」と綿貫君が言う。
ちょっと信じられないけれど、綿貫君は双子らしい。
しかも、もっと信じられないけれど妹さんはとても華奢で可愛いらしいって野球部の男子が騒いでいた。

「俺、大学に行くか、わかんないな」
綿貫君が言う。
「センバツで注目されて夏もがんばれば。そのまま、なぁんてな」
綿貫君が笑う。
つまり、プロってこと？
「凄い。そこまで綿貫君が野球をやりたいなんて知らなかった」
私にとっては「同じ学校のクラスメイトで、野球部で、色は黒くて体も大きな男の子の綿貫君」なのに、彼の向こうには、私の説明だけでは語れない大きな大きな世界が広がっているんだと思った。

凄いなぁって思った。
しかも野球なんて。
自分の身一つでやっていく世界だ。

「綿貫君は、恐くない？　プロになると今まで以上に人から注目されたり、期待されるでしょ」

何かで有名になるってことは、個人が個人でなくなってしまうような気がしたから。
綿貫君とは全く違うけれど、父親のことで私がそうだったから。
注目されて、私のことなのに私以外の人が私の人生について語っていたり。

それは私にとっては恐いことだったから。

「やりたいことだから、やるしかないって思うよ。注目されようがそのされかたが不本意な形でもさ」

不本意な形での注目のされ方。
頭の中に、いろんなプロのスポーツ選手が浮ぶ。
プレイだけでなく、その私生活まで注目される選手達。
この目の前にいる同級生にも、いつかそんな日が来るのだろうか？

「今回だってセンバツに出るってことになったら急に親戚が増えたりとか、妹が『友だちから～』なんて言って手紙とかプレゼントを大量に持ってきたりとかさ。周りもちょっと浮き足立つというか。でも、うん。野球は自分がやりたい一番のことだから、それによっていろいろあってもそれはどうでもいいっていえばいいんだ」

そう言うと、綿貫君は私のことを見て、「なぁんてね」と言って

丸めたノートで自分の頭をぽかりとぶった。

「でも、実際は。うん、正直そうは思えないときも確かにあってさ。自分やチームのことを好き勝手に言う話を聞くと、やっぱり。ね。でもさ、まぁそうじゃない奴等もいるから、俺がどうなろうと変らない奴等もいるから、だから大丈夫っていうか。つまり、そのままの、野球をやりたいだけの気持ちに戻れるっていうか」

綿貫君の言葉に、私も素直に頷けた。

自分がやりたいことがあるから留まれるってこと。

父の会社が新聞に載った時、母は私に転校してもいいよと言ってくれた。

でも私は、ここの学校で勉強を続けたかったから、だからどうにかここに留まれるようにと考えたし。

いろんなことを言う人がいる反面で、いつも通りに友だちでいてくれた人もいる。

クラスメイトでいてくれた人も。

確かに、うん、そうだ。

綿貫君の言葉は、私の心の中にもある言葉だった。

馴染みがあって、実感のできる。

こんなに強い綿貫君と、笹の葉の小船に乗っているような不安定な存在な私に、意外な共通点があったことに驚いた。

そして、なんだか元気が出てきた。

綿貫君みたいに、私ももっと頑張れそうな気になってきた。

「もし、野球で稼げるようになったらさ。俺、坂井の勉強の手伝いをしてもいいよ」

綿貫君が私から視線を逸らして、そう言った。
「勉強の手伝いって、綿貫君が私に勉強を教えてくれるって。あれ、え？」
自分でそう言いながら、あれ、これはそんな意味じゃないって思った。

「試合前でも緊張しないんだけどなぁ」
そう言って綿貫君が、ちらりと私を見て舌を出した。

あ、ちょっと。
私、そっち方面は全く免疫ないから。

「ま、期待してて」
綿貫君がそんな言葉を残して、教室を出て行く。
綿貫君が廊下を歩く音が聞こえる。
そしてそれは、階段を下りる音へと変わった。
一段飛ばしで下りていく、大きく、そして不規則な音。

タン
―　タン
――　タン
―――　タン

その綿貫君の足音と共鳴するかのように、私の心臓がいつもよりも高い音で鳴りだした。
そして最後の「タン」が聞こえる頃には、あっけないほど情けないほどに、綿貫君が、クラスメイトから分別不可能な存在に、ころりと変わってしまっていた。

鼓動

「あれ、いいよなぁ」

四月が来ればいよいよ六年生なんだなぁ、なんて思いながらコップにサイダーをじょぼじょぼと注いでいた私は、篤志（あつし）の言葉に反応してテレビのその画面に目を向けた。

するとそこには、篤志の好きな野球が映っていた。

「巨人戦？」

そう私が聞くと、「おまえ、ほんと何も知らねぇなぁ」と篤志は言い、私が手渡したコップからごくごくとサイダーを飲んだ。

「センバツだよ。センバツ」

「せ・せせせ？　何それ」

そう私が訊くと、篤志は大げさに溜め息をつきながら、「高校野球だよ。甲子園」と言って再び視線をテレビに戻した。

コップを持って篤志の隣に座る。

「だったらさ、最初から高校野球って言ってよ。センバツって何よ」

そう私が文句を言うと、「センバツだから、センバツなんだって」と野球少年篤志はそう言ったっきり、私への説明が面倒になったようで、画面に釘付けになっていた。

サイレンの音が鳴った。

どうやら試合が始まるようだ。

篤志と違って野球なんてちっとも興味がない私は、サイダーから跳ね上がってくる炭酸をぴちぴちと唇で受けて遊んでいた。

――――　さっき篤志が「いいよなぁ」って言っていたことって、一体何なんだろうって思いながら。

篤志のあの言葉を聞くまで、全く興味のなかった高校野球だったけれど、篤志の「いいよなぁ」が何なのかがとても気になって、それから高校野球を気にして見るようになった。

すると、なるほど。

高校野球には、春と夏があるんだってことを知って。

おまけに、春は「毎日」で夏は「朝日」だとか。

そうこうするうちに、野球少年篤志は中学に入ると少し注目される打者になって、高校でも野球部が伸びてきていると言われてきた高校に入って。

更には、「もしかしたらセンバツに選ばれるかも」なんていう噂まで流れ始めて。

――　そしてそれは、なんと本当のことになってしまったのだった。

「私の方が緊張してきたよ」

篤志が荷造りをしている様子を部屋の入口に座って眺めながら、私はそう言った。

「ばぁか。今から緊張してたら、試合が始まる頃にはコチコチの石みたいに固くなっているって」

「コチコチの石ね。でもコチコチの石になる前に、心臓がバクバクの破裂になっちゃうかも」

私がそう言うと篤志は笑った。
篤志が笑ったので、私も一緒に笑った。
笑いながらも、部屋が窮屈そうに見えるほどでっかくなった篤志のことを見ていた。

一緒にサイダーを飲んでテレビでセンバツを見た頃は、ほぼ同じくらいの大きさだったのに。
同じ両親からほんのちょっとの時間差で生まれただけなのに、こんなに違っちゃうなんて随分じゃないかなぁなんて思ったり。

「あのさ。ずっと訊きたかったんだけれど。篤志はさ、何が『いいなぁ』なの？」

あれから高校野球を知るとともに、篤志の野球人生にも付き合いだしたけれど、それでもその答えがわからなかった。

「は？　何のことさ」
日に焼けた顔をこっちにむけて、篤志が首をかしげた。
「いや、だからさ。篤志は覚えていないかもしれないけれど、あの、ほら、大昔にセンバツを見ながら篤志がさ、『いいなぁ』って言ったのよ」
「センバツを見ながら？」
なんだなんだ、と篤志が言う。

「ええとね。正確に言うと、試合前なの。試合が始まる前にテレビで球場の様子が映って。でもまだ何も始まっていないのに、その画面を見て篤志がそんなことを言うから、私は凄く気になって」
そう私が言うと篤志は、「あぁ。はいはいはい」と言って笑った。

「あれね。うんうん、わかったわかった。でもなぁ、おまえに教えるのって、なんか勿体ないなぁ」
そう篤志が言う。
「え、覚えているんなら教えてよ。けち」
「けちだと？　そんなことを言うなら教えない」
「……わかった。謝るから、だからお願い、教えてよ」

私がぺこぺこと謝りだすと篤志はふんふんと偉そうな顔して、でも次の瞬間は私と同じくらいの背の高さだった頃からの、昔からの顔をして、そして教えてくれたのだ。

両親と一緒に新幹線に乗って、新大阪で降りる。
新大阪から大阪に出て、大阪から梅田まで歩いて、そして梅田からいよいよ甲子園までの電車に乗った。
駅を降りると、ぞろぞろと甲子園球場までの道を多くの人が歩いている。
そしてその波は右に左にと、それぞれの応援高校側の入口に向かって別れていく。
球場の周りを歩きながら、テレビで見た通りの蔦の絡まる球場を見上げた。

「あぁ、やだ。緊張してきたわ」
母はそう言うと、私の手を握ってきた。
「お母さん。私もね、出発前の篤志に今のお母さんと同じようなことを言ったんだ。そしたら篤志がね、『今から緊張してたら、試合が始まる頃にはコチコチの石みたいに固くなっている』って言った

んだよ」
「だからね、はい。リラックス、リラックス」と言いながら母の肩を揉むと、母は「篤志って私が産んだとは思えない程図太いわぁ」と言って笑い出した。
「母さんの子だから、図太いんだろう」
なんて父も軽口を言いながらも、顔はちょっぴり緊張モードだった。

そんなこんなの話をしながら列になって並んで、係りの人にチケットをもぎってもらい、スタンドへと行く階段をのぼっていった。
私が緊張してどうなる、と思いながらも、階段を一歩上がるごとにやっぱり緊張してしまう。
そんな私たちの目の前に、のぼりきった階段の向こうに、綺麗な甲子園のグリーンのグラウンドが広がっていた。

席に着く。
試合開始時間よりも前に、選手たちがグラウンドに出てきた。
拍手があがる。
そして選手たちは、キャッチボールを始めた。

――――　「甲子園でするキャッチボール」

それは私の疑問に出発前の篤志が教えてくれたこと。

――――　「あの時さ、センバツのテレビにちらっとそんな様子が映ってさ。『あぁ、俺も甲子園でキャッチボールがしてぇ！』って思ったんだ。キャッチボールをだぞ、甲子園で。贅沢っていうか、すげーかっこいいっていうかさ」

勿論それは、甲子園に出られないとできないこと。
出られた選手だけができること。

あの時一緒にテレビを見ていた篤志は、今はテレビに映る側になった。
テレビで高校野球を観て選手たちのプレイについて熱く語っていた篤志が、今はアナウンサーや解説員の人たちに語られる側になった。

「あれ、いいよなぁ」って言った篤志は、とうとうそれを自分のものにした。

一度ベンチに戻った選手たちが、再びマウンドに向かって走り出す。

「がんばれ」

篤志の春が始まった。

そしてその姿を。
日本のあちこちにいる篤志に良く似た野球少年たちが、どきどきとしながら見ていることだろう。

恋心

センバツが終ってから、俺の身近な二人の人物の様子が変だ。

双子の片割れである妹は雨が降ると元気がなくなるし、野球部のエースの山中は今まで以上に練習量を増やしていたのだ。

「おかしい」

「おかしいって。この眼鏡のこと？」

そう言うと坂井は、最近フレームを替えた眼鏡をいじった。

なんでも、この間転んで壊してしまったとか。

聞いたときはびっくりしたけれど、顔に怪我もないようで安心した。

しっかりしているように見えるけれど、坂井はそういうところもあるようだった。

「あ、ごめん。違うって」

俺と坂井は、三年になっても運良く同じクラスになり、なんていうか、まぁ、こんな感じで仲も良くてこうして昼休みなんかは一緒に弁当を食べたりするようになっていた。

今日は天気もいいので、学校の中庭の木陰になったベンチで食べていた。

共学のせいか、俺達だけじゃなくて男女で一緒に食べている奴等は多かった。

「おかしいのは、山中とうちの妹」

「あぁ、山中君と妹さん？　ふーん」

そう言うと坂井は、自分の弁当に入っていたかぼちゃの煮物を俺の弁当の中に、コロンと入れた。

「カロチン」
「ありがとう」
坂井は弁当のおかずをくれるときに、おかずの名前を言わずにその栄養素を言ってくる。
おもしろい。

「あのさ。女の子って雨が降ると元気がなくなるっていうか」と言いながら、妹の様子を思い出す。
あれは元気がないというよりは、それより更に進んだ状態だよなぁと。
「雨が降ると、泣きたくなるもん？」
早速坂井から貰ったカロチンを頬張りながらそう聞くと、坂井は考え込むような仕草をみせた。
「それは、うーん。確かに雨はそんな気分にならないとは言えないけれど。でも」
坂井が言葉に詰まる。
「もしかしてそれって。妹さんのこと？」
俺が頷くと、坂井は「あ、そっか」と言った。
「もしかして、それってセンバツが終ってから？」
ギョッとして坂井の顔を見る。

「俺、そんなこと言ったっけ？」
「言ってないよ」
「じゃ、なんで？」
そう言うと坂井が複雑な顔をしてきた。
「それは、多分。それなら私もわかる感情だから、かな」
坂井が驚くようなことを言ってくる。
「私も。私は、東京にいてテレビを見ていたわけだけれど。センバツの二回戦で、あの雨の中で綿貫君たちが負けたとき。そんな気持ちだったから」

え？　そこが原因？

「テレビって酷いもん。雨の中でどろどろになりながらグラウンドに立っているみんなの姿をそのまま映して。特に山中君なんかピッチャーだから、しつこいくらい正面からの顔が映って。見ていて辛かった」

俺達の高校は、この間の春の選抜に選ばれて、二回戦まで行った。

そしてその二回戦目は、途中雨が降り出し、でも試合を中止するほどの雨という判断は出ずに、その中で繰り広げられた試合だった。

結果、サヨナラで俺達のチームは負けた。

負けてしまったのだ。

俺が小さい頃からしてみたいと思って――――　そして現実のこととなった、甲子園でのキャッチボールは二回で終った。

「雨の中で試合をするのは珍しいことではないけれど。確かに、まぁ、思い出深い試合だったよな」

新幹線や夜行バスに乗って大勢の人が応援に来てくれていた球場だったけれど、雨のせいか神経がとても研ぎ澄まされ、ただただ野球の世界だけに生きているような感覚だった。

あれは、不思議な体験だった。

「妹さん、辛かったんだよ。雨の中で綿貫君がプレイしているのが。自分のことのように、辛かったんじゃないかなぁ」

あの、妹が？
俺を見て辛い？

「だって、仲がいいんでしょ？　綿貫君たち。　それに双子って、何かテレパシーみたいのがあるっていうのも聞くし」
テレパシーねぇ。
「そういえば、俺よりも緊張していたっけなぁ」
「でしょ？」
そうか。じゃあ、今日は妹の好きな雪見大福でも買って帰るかなぁ。

「山中も、やっぱりセンバツ絡みなんだろうしなぁ」
「山中君も、雨だと元気がなくなるの？」
「いや。山中はそうじゃなくて今まで以上に練習熱心になったってことなんだけれど。それに、ほら。坂井はあまり知らないかもしれないけれど、山中はもとから元気ハツラツって感じのはじけた奴ではないからさ」

そうなんだよな。
山中はどちらかというと、真面目で無口でポーカーフェイスで。
でも、そんな山中の普段の様子について坂井が知っているかは不明だ。
山中は別のクラスだし、坂井も積極的に男子と話すようなことはないからだ。
それは、こうして弁当を食べるようになる前は安心なことでもあったけれど、逆に同じクラスでありながら「坂井って俺のこと知らないんじゃないの？」とも思ったりもした。
顔は知っているけれど、名前は覚えていない、とか。
それは笑えない心配事でもあった。

だから、センバツ前に放課後の教室で坂井と話したときに、彼女が俺の名前を呼んだ瞬間、舞い上がってしまった。
すごく次元の低い喜び方かもしれないけれど、それでもう、坂井とはうまくいくんじゃないかって思えたんだよね。
いつもながら、単純。
でも、俺ってそういう単純な思い込みというか、ひらめきっていうので今までも突き進んでそれを実現してきたから。
だから、それは単純ながらも信じられることでもあったのだ。

坂井からのカロチンを頬張る。
へへへ、と思う。
確かにセンバツでは負けたし、夏となるとまた予選からなんだけれど。
俺はやる気満々。
こうして隣には坂井もいるし。
なんか、青春って感じで盛り上がってきたなぁ。

と、ふと。
山中のことに意識を戻す。
青春といえば、あれ。
何かで山中が顔を赤くしたのを見たような覚えが。
さらにさらに、別件で山中に関して最近「あれっ」て思ったことがあったような。

「篤志、ノート返す」
突然背後からその山中本人の声が聞こえて、坂井からのカロチンが俺の喉に詰まりそうになった。

「お、おう」
山中が差し出してくるノートを受け取る。

ガサリと紙袋の音がした。
「山中君もお昼まだなら一緒に」
俺が言う前に、坂井が山中を誘った。
正直ちょっと驚いた。
山中は左手に売店の薄茶色した紙袋を持っていた。
「うん」
いつになく素直に山中がそう言って、俺達に加わった。

珍しい。
山中がこんな風に女の子と話すのは。
たいてい、無視するか。
うん、無視するか、無視するか、無視するか。
あれ。

「あ」
俺の声に坂井と山中が、「え？」って顔してこっちを見てきた。
「ごめん。なんでもない」
なぁんて言いながら、もしかしてこれって、もしかしてなのか？
なんて思い、汗が出てる。

あのセンバツの時。

試合終了後、俺達も客席の人も次の試合のために速やかに退場することになっていたのだか。
そんな中、フェンスの向こうでびしょ濡れになった妹が退場する俺達をじっと見ていて、そして――　その妹に気がついたのは山中もだったようで、山中は妹に向かって帽子を脱いで頭を下げたのだ。

試合に負けたっていう悔しさ９９パーセントの頭の残り１パーセ

ントで、「山中って礼儀正しい奴なんだなぁ」って思っていたわけだけど。

冷静になって考えると、男子や先輩になら話は別だか、山中が礼儀正しいなんて（しかも女の子に）、ありえないことで。

なんたって「無視するか、無視するか、無視するか」の山中なんだから。

なんだよ。

そ、そういうことかよ。

それは、ちょっと複雑な気持ちだよ。

山中が妹のことを。

しかし、そんな視点で今までのことを思い出すと、そういや山中は妹から渡されたものは受けとっていたなぁ、とか。

そうそうそれも、赤い顔して。

別に妹が個人的なプレゼントを渡したとかいうんじゃなく、うちの親からの差し入れのジュースとかそんなんだけれど。

あれは去年の夏のある日。

暑くてもう死にそうって思い９９パーセントの頭の残り１パーセントで、「あ、山中が女から物を受け取って顔を赤くしている。でもあれは俺の妹だから身内みたいなもんか」って思っていたけれど。

そしてその時の、赤い顔も暑さのせいだと勝手に思っていたけれど。

そういうことでしたか、山中クン。

そうかぁ。そうなんだぁ。

ほぉ。

「おまえさ、今度うちに夕飯を食いに来る？」
山中にそう聞いてみる。
「坂井さんも行くなら」
山中が即答してくる。
「えっ。わ、わ、わ、私？」

坂井がうろたえたような声を出して、俯く。
おもしろい。
かわいい。
けどそんな坂井を見ていると、こっちまでこう恥ずかしくなってきて、やばいと思いつつ顔が赤くなる。

ふと、山中と目が合う。

涼しそうな山中の顔。
やってくれるじゃないのさ、山中クン。

赤い顔のままで山中を睨みながら、この仕返しはどうしてやろうかと俺は策を練り始めた。

アレルギー

ユニフォームのままで校舎に向かっていたら、自転車置き場のほうから嫌な感じの声が聞こえた。

悪意を含んだ女の声とそれに応える小さな声。

――　ぞっとする。

あぁ、本当に女って、女をいじめるのが好きだよなぁ（まぁ、男も男をいじめるけど）、なんて思いながら通り過ぎようとしたら、何かを踏みつけたような音がした。

流石に気になってひょいと顔を出すと、そこには綿貫が「へへ、仲良しなんだよ」と言っていた坂井さんが立っていた。

坂井さんのお陰で、もとから明るくて元気の源のような綿貫が、一段とパワーアップをして打撃面でも絶好調だった。

打者に元気があるというのは、投手である俺の立場からするととても頼もしいことだ。

ガンガン打っている綿貫を見ながら、どうかこのままでいてほしいと願っているのは俺だけじゃないはず。

坂井効果。坂井特需。ありがたい。

そしてそんな坂井さんの正面に立ち、俺に背を向けるようにして一人の女が立っていた。

坂井さんといえば、途方にくれた顔をしていた。
つまり、坂井さんは、言われている立場なのだろう。
その坂井さんだが、どうもの彼女の何かが足りないような気になった。
するともう一度、グシャって音がした。
見ると、こっちに背を向けている女が何かを踏みつけていたのだ。

――　あぁ、眼鏡か。

坂井さんの顔に足りなくて、その女の足元にあるブツはそうなのだ。
あの女また面倒なことを、どうしてわざわざするんだろう。
最初の場面は見ていないからわからないけれど、今のは明らかに意思を持った行為だ。
そんなの、社会人になったら通用しないのになぁって呆れてしまう。
女子高生ってだけで、全ての行為が免罪符になると思わせている世間もいけないんだろうなぁ、と。
愚かだ。とても。

「綿貫君は大事な時なんだから、邪魔しないでよ」
坂井さんに向けられたその声に、ぎょっとした。
あの声は、去年までうちの部のマネージャーをしていた子のものだ。
彼女は綿貫のことが大好きで、挙句半ストーカーじみたことまでしてしまい、監督やその当時の部長から注意された結果、クラブを辞めた子だ。
うえぇ。

面倒。
しかし、まぁ、見過ごす訳にはいかないんだろうなぁ。

「古嶋さん」
背中を向けている女に声をかける。
古嶋さんは、びくんと背中を震わせた後、ゆっくりとこっちを振り向いた。

「や、山中君」練習じゃ、と古嶋さんが言った。
あぁ、練習中だと確信してやっていたってことかぁ。
「うん、ちょっと用事があって」
そう言うと、俺は古嶋さんの足元を指差した。
「駅前の眼鏡屋」
そう言うと古嶋さんは、とびあがらんばかりに驚いた顔をして、両足でその踏んでいるものを隠そうとした。

「ファストメガネっていうんだっけ。最近流行りの安くて短時間でできるやつ。あそこで買えば一万しないで買えると思うから」
坂井さんのメガネは、そういった眼鏡屋で作った感じのものではなかった。
恐らく、古嶋さんの足元にあるのは、万単位のものなんだろうな、と思いつつもそう言った。

「明日、眼鏡の領収書を俺に見せて」
そう言うと、古嶋さんは俯いた。
「古嶋さん、綿貫の事を思うならさ、夏が終わるまでは坂井さんのことは放っておきなよ」
古嶋さんが怪訝そうな顔で俺を見た。
「夏までは、まぁ、綿貫の好きにさせてさ、夏が終わったら坂井さ

んを煮るなり焼くなりしたら？」
俺のその言葉に、古嶋さんは「はぁ？」という顔をして、そして坂井さんはなんと笑いだした。

ふーん。
坂井さんって、こういうことで笑える子なんだ。
それは、いい。
うん。

「じゃ、そういうことで」
そう言うと俺は、職員室へと向かった。

職員室に入ると、俺を見つけた先生がこっちこっちと手招きをした。
「ねぇ、本当にいいの？　繋がないこともできるのよ」
担任がそう言いながらも、それが解決にはならないって顔はしていた。
「大丈夫です。話、聞くだけですから」
そう言って保留になっている受話器を持った。

電話の向こうでは、母の涙ぐんだ声が聞こえた。
数年前に父方の祖母と同居してから、母曰く、いじめられるらしい。
そして、祖母がデイサービスで出かけている時間に、たまにこうして電話をしてくるのだ。
一緒に住んでいる俺にだ。
話をほんの五分聞くだけで、母が安心できるならそれも仕方がないんだろうなと思い、担任と監督だけには事情を話しこうして練習中でも電話を取り次いでもらっている。

いっそ、と思う。
古嶋のように、坂井のメガネを壊すようなわかりやすいことが二人の間で行われれば、あのぼんくら親父も動くんだろうなって思う。

自分の目に見えるものしか信じない。
……それは、俺もそう。
親父が自分の母である祖母の話を受け入れるように、俺も自分の母の言葉を（祖母とのそういった現場を見ていないにも関わらず）受け入れているのだから。

でもなぁ、と思う。
もしかしたら、祖母が母をいじめている云々でなく、母がこういった行動に出ることの意味を見い出すことが（結果、そこに祖母からのいじめがなくても）重要なのかもしれない。
話を訊くなんて、一見は親孝行っぽいが、実は逃げているだけかもしれない……。

そんなことを思いながら母の話を電話で聞いていたら、途端に体が冷えてきた。
決して寒くはないはずなのに、ぶるっと鳥肌がたった。

そっと目を閉じる。
――　あたたかな。
あたかかな場所。
そう、あたたかくて、穏やかな場所に行きたいと思った。

たとえば、綿貫の側に。
たとえば、綿貫の双子の妹の側に。

心配ごとなど、何もないような場所に。

二人の事を考えて、そっと溜息をついたあと、俺は受話器の向こうにいる母に、明るい声で相槌を打った。

デリカシー

酒向（さこう）　覚（まなぶ）には、デリカシーがない。

「あ、綿貫の野郎。また坂井さんと密会かぁ？」

昼寝から覚めた酒向　覚は、周りに綿貫君たちがいないのを知ると、半袖のシャツを肩までまくり、日に焼けた太い腕をぼりぼりと掻きながら大きく欠伸をした。

「わ、なんか変な物体が降ってきた」

私のやっているプリントの上に、カスッとしたものが落ちてきた。

「あれれ。プリント？　あ、キミ、赤点組でしたか」

「うるさい。単に、英単語のテストがあるってことを、忘れていただけですぅ」

酒向　覚から隠すようにして、最後の単語を書き込んだ。

「覚えていたら、ちゃんと勉強していましたよ」

「勉強？　それくらいの単語、勉強せんでも間違えんだろうし」

もう一度ふわぁと欠伸をしながら、酒向　覚が言う。

くあぁ。どうせあんたは、赤点を免れる程度には、頭がいいんでしょうよ。

頭にきたんで、ちょうど机の上にあったプラスチックの定規で、酒向　覚の腕をペシペシと叩いた。

「いたた。おまえはどっかの女王様かっ」

私から素早く定規を取り上げると、酒向　覚は私の髪の毛の中にその定規をさした。
「かんざし」
「うっ。ひ、ひどいっ」
私の癖のある髪に、それは面白いくらいぴたりとおさまった。
思いっきり、気にしているのに。
そーいうこと、してほしくないのに。

酒向　覚は昔っから、そうだった。
そういったポイントを外すことなく、ズバリとついてくる奴だった。
デリカシーがない。
頭に来る。

でも、そういったところが、きっと彼の勝負強さに関係しているんだとも思えた。
酒向　覚は、うちの学校の野球部の正捕手だ。
どちらかというと線の細い山中君と、無駄に（でもないか）体格のいい酒向　覚は、絵にかいたようなバッテリーだ。
そして、無口な山中君をそれこそ補うくらい、酒向　覚はよくしゃべる男だった。

「で、ここにいないってことはあの二人、一緒にどっかいったんだろ」
「……知らないよ」
「あ、不機嫌そう。佐希子は置いて行かれたって？　あれ、おまえも綿貫ファンだったっけ？」
「違うよ」
「じゃ、なんでそんな不機嫌そうな顔をしてるんだ？」
「あのね。あんたね。人の髪の毛に定規をさしておいて、よくそん

な戯言が言えたもんよね」

こっちの憤慨に驚いた顔して、酒向　覚がゆっくりと視線を私の頭に向けた。

「おお。俺ってセンスあるなぁ。大学、芸術系にするか？」

「勝手に言ってなさいよっ」

私は勢いよく定規を頭から引き抜くと、酒向　覚の頭めがけてスコンとそれを下ろし、プリントを提出すべく職員室へと向かった。

私と酒向　覚は、小学生の頃からの気の置けない仲間だった。

うちの兄も野球をやっていたこともあって、酒向　覚とは違う小学校ながらも付き合いがあったのだ。

自他共に認めるブラコンの私に、酒向　覚は「おまえの兄ちゃんって、すげーかっこいいな」なんて、最上級のセリフを初対面で言った。

うちのお兄ちゃんを褒める男の子と仲良くしないはずはない私は、中学では学区域の関係で、高校では意図的に酒向　覚と同じ学校に進んだ。

職員室へと降りていく階段の踊り場に来ると、出窓の向こうに、木陰の涼しそうなベンチに座る綿貫君と坂井さんの姿が見えた。

二人は並んで、ブリックパックのコーヒーを飲んでいるようだった。

坂井さんは、背中をしゃんと伸ばして座っていた。

そして綿貫君は、大きな体を二つに折り曲げ、時折坂井さんの顔を覗き込むようにして話しをしていた。

クラスや、私たちと一緒にいるときは「男の子」な綿貫君なのに、

こうして坂井さんと一緒のところは「男の人」って感じがした。
不思議。
酒向　覚も、あんななりして、好きな子と一緒だとあんな風になるのかなと思うと、胸の奥がざわざわとした。

「あ、いたいた」
蜂蜜を探すクマみたいな様子で、階段から降りてきた酒向　覚がそう言いながらにやりと笑った。

「お探しの綿貫君がいてよかったな」
「え、なにそれ。だから、探してないって言ってるでしょ」
私がそう言うと、酒向　覚は私のウエストを許可なく掴んでぐっと持ち上げ、その出窓の深いヘリに私を座らせた。
驚きのあまり声が出ない。

「佐希子、ちっせー」
にやにやしながら、酒向　覚が私を見ている。
「う、うるさい。成長期がこれからってだけのことでしょ！」
ぐるるるると唸りながら、酒向　覚を睨む。

「いや、さ。ほら、明日からいよいよ地区大会だからさ」
唸るのをやめて、酒向　覚を見る。
「だから、ほら、描いてもらおうと思ってさ。いつものやつを。掌にさ」
そう言うと、まるでどこかの騎士にように酒向　覚が右手を私に差し出してきた。

「いつものって、『ロロ』のことだよね」
「うん、あの変な顔の犬」

「ま、いいけど。で、ペンはある？」
「もち」

酒向　覚は、ズボンの左ポケットから油性細字ペンを取り出すと私に渡してきた。
そして私が持っていたプリントは、酒向　覚の左手に渡った。
「ロロ」っていうのは、私たちが小学生の頃に流行っていたアニメのキャラで、変顔の犬だった。
そのキャラを偶然私も酒向　覚も好きで、私が自分で左の掌に書いたのを酒向　覚が見て「おれにも書いて」って右手を差し出してきたのがそもそもの始まりだ。
学校の水泳の検定試験で、なかなか上の級に進めなかった酒向　覚が、私が描いた「ロロ」のままの手で泳いだら受かったということで、それ以来、勝負事の前になると酒向　覚は私にロロの絵を描いてくれとペンを差し出すようになったのだった。

大きくごつい酒向　覚の手をとる。
描く絵の大きさは変わらないのに、年々それが小さく見えてくる。
一番最初なんて、もしかしたら私の手のほうが大きかったかもしれないし。
けれど今では、もしかしたらうちのお兄ちゃんよりも大きいかもしれない。
人の成長って凄い。

「酒向の手って立派だねぇ。キャッチャーミットなんていらないくらい、しっかりしているんじゃない？」
すると、酒向　覚が大きくため息をつく音が聞こえた。
はてな、と思い顔を上げ酒向　覚の顔を見た。
酒向　覚は、私の顔を見ると、またわざとらしくため息をひとつ

ついた。

「あのさ、ずっと前から佐希子に言いたいことがあったんだけど」
そう言うと、酒向　覚はじっと私の顔を見た。
なので、私もじっと日に焼けた酒向　覚の顔を見た。

じっと見ながら、酒向　覚の瞳の色がどちらかというと茶色っぽいことや、眉毛の下に小さなほくろがあることを今更ながらに発見して、変な気持ちになった。
急に、こんな風に手をとってその掌に絵を描いていることが、恥ずかしいような気持ちにもなってきた。
またまた、胸の奥がざわざわとしてきた。

「佐希子ってさ、デリカシーに欠けるよな」
へ？
「だって、ミットなしでもなんて、そんなのあり得ないじゃん。いくらなんでも山中の球、素手でなんて取れないって。俺はモンスターかよって」
「別にそういう意味では」
「うんにゃ。思ってる。おまえが坂井さんに俺のこと『クマ』っていうの聞いちゃったことあるもんね」
言ったか、そんなこと。
……言ったかもね。

「俺の中で『クマ』って毛むくじゃらなイメージがあったからさ。俺ってそんなかよ、って思ったし」
「いや、別に、毛の濃さは関係ないし」
「しかもさ、それを聞いた時に山中も一緒にいてさ。で、あの滅多に笑わない山中が『ぷっ』って笑ったんだよな。キミの『クマ』発言で」

は？

「俺がいくら山中を笑わせようと、あほなことを言っても笑わないのによ。ショック大だよ」

ショック大、ショック大と、しつこく酒向　覚は連呼しだした。

つまりあれですか。

この男は、私の何気ない発言が山中君がウケたのが、気に入らないってことですか。

「あほか」

「あほはどっちだ」

「あほは、おまえじゃ」

「英単で赤点のおまえが言うか」

そう言うと酒向　覚が私のプリントをひらひらさせた。

「ちょっとぉ～、返しなさいよぉ！」

「やだね」

ちくしょう、って手を伸ばしたら、そのまま体が出窓のヘリから浮いてしまった。

「うわ、佐希子！」

「え」

わわわわわ、と大騒ぎな中、気がつくと私は酒向　覚の腕の中にすっぽりと格納されていた。

「は、はははは」

酒向　覚はそう言って力なく笑うと、私を格納したままよろよろとななめ後ろにさがり、壁を背中にするとそのままずるずるとしゃがみこんだ。

はぁ、と大きなため息をひとつつくと、酒向　覚はがくりとうな

だれた。
私の耳がくすぐったく感じるくらいそばに、彼の耳があった。
「うわぁ、ちょっと驚きのあまり腕が固まって解けん」
「あ、あぁ、うん」
確かに、あのままだったら私は出窓から踊り場に落ちてしまっていただろうから。
感謝するべきなんだろうけど、そもそもの原因はこいつだしぃ。
「まさか、人までキャッチするとは思わなんだ」
「あ、あぁ、うん」
そう答えつつ、一体いつまでこいつに格納されているのだろうかと考えると汗が出てきた。
通る人たちが、ぎょっとしたような顔でこっちを見ては過ぎて行く。
そんな様子にも汗が出る。
それに、こんな風に男の子に近づいたことないし。
あ、もう、ますます汗が出てきますが。
「手、離すし」
そう言うと酒向　覚は、ゆっくりと私を脱出させるべき出口を開け始めた。
お互いしゃがみながら、見つめ合って、はぁ、と大きくため息をついた。
「ちょっと、驚いちゃったんだけどさ」
酒向　覚が真面目な顔で、私に話し出す。
「佐希子の胸を感じた」

はい？

「佐希子も、大人になっていたんだねぇ」

五、六時間目。

会う人会う人に、酒向　覚はその顔についた掌の跡を聞かれては誤魔化していたけど。

私はちっとも、同情なんかしないもんね。

見て見ぬフリ

「何をやっているんだか」

聞き慣れた声に顔を上げると、エースピッチャーの山中が階段を下りてくるところだった。

踊り場に尻もちをついていた酒向（さこう）はよいしょと体を起こすと、「どっから見てた」と低い声で山中に聞いた。

「上から」

山中は酒向からの質問にわざと外して答えるような顔で、そう言った。

「あ、そ」

ぱんぱんとズボンについた埃を払うと、酒向は不機嫌そうな顔のままぷいと山中から顔を逸らした。

「顔、冷やす？」

山中がズボンのポケットからハンカチを出してきた。

「おまえは、王子様かって」

山中は、一瞬きょとんとした顔をすると、ひゅと肩を上げそのままハンカチをしまった。

――　何をやっているんだか。

本当にその通りだと、酒向は思った。

どうして、こう上手くいかないんだろうと。

ドラマや漫画では、簡単に登場人物同士がくっつくというのに、酒向が佐希子にできることといったら、せいぜい試合にかこつけて掌に絵を描いてもらうことくらいなのだから。

そんな様子に、あの山中でさえ呆れていて、更に綿貫にいたって

はこっちが頼みもしないのに何かと協力しようとしているのも知っている。
でも、変なプライドから、それらに見て見ぬふりをする酒向だったのだ。

佐希子に対して、あと一歩も二歩も三歩も四歩も踏み出せない大きな理由は、佐希子の兄にあった。

佐希子の兄は、地元の中学から甲子園常連校に進学し春夏の大会に出場したうえ、大学に進んだ今もなお一目置かれる選手だった。

なまじ、野球という同じ土俵にいるだけに。
佐希子がブラコンだと知っているだけに。
そもそも、自分が何気なく言った佐希子の兄を褒める言葉が、佐希子のアンテナにひっかかっての現在の二人の関係であることを知っているだけに。

その先に行けない、酒向なのであった。

――　あの兄を超えるなんて、たぶん、一生無理。

高校を卒業したら、佐希子とは進む大学も違うってことはわかりきった事実。

「全く、おまえはシンデレラかって」
佐希子姫が忘れていったガラスの靴ならぬ英単語のプリントを拾いながら、煩悩成分九十パーセントのため息をつく、酒向　覚なのであった。

カルピス

双子の間にテレパシーってものがあるのなら、今すぐ篤志に出て来て欲しかった。

「あれだけ言ったのに、鍵を持って行くのを忘れるなんて」

携帯を片手に握りしめ、篤志の学校の正門の前でうろうろとする。

今日は両親が祖父母宅に行き、帰りも遅いので、私たちは必ず自宅の鍵を持って学校に行くようにと母から言われていたのだ。

なのに、篤志が朝練の為にと朝早くに学校へ行ったあとの玄関を見ると、靴箱の上にキーケースがちんまりと載ったままだったのだ。

焦って篤志にそのことをメールしたら、「悪いけど放課後学校まで持ってきて」って返事が来て。

だからこうして、わざわざ篤志の指定する時間に届けにやって来たというのに。

篤志ってば、出てくる気配もないですよ。

どうします？　この息子を。お父さん、お母さん。

私だって、これから塾だっていうのに。遅れてしまいますよ。

そんな私の耳に、くすくすとした笑い声とともに「彼氏待ちじゃない」って女の子たちの台詞が飛び込んできた。

思わず顔を隠すように出てくる人たちに背を向ける。

ま、まさか、そんな。

彼氏だなんて、とんでもない話ですよ。
私が待っているのは、正真正銘の兄なんですからねっ！　ってな魂の叫びは、届くはずもなく。

だから、篤志。
早く出て来いっ！

「え」
突然、背中から聞き覚えのある声がした。
「え？」
振り向くと、篤志のチームメイトの山中君がペットボトルを手に立っていた。

山中君！
うわぁ、本物。

途端に顔が赤くなるのを感じつつ、「あの、篤志は」と友達の妹の顔をして訊いた。
すると山中君は、「あっ」と言ったっきり黙ると、しばらくしてから「そういうことか」と言った。
そして困ったような顔をすると、手に持っているペットボトルを私に差し出してきた。

「これ」
「これ？」
山中君から渡されたペットボトルを受け取る。
「篤志から」
「篤志から？」
山中君の言うことを繰り返してばかりの会話に、軽く自己嫌悪。

「うん。篤志から正門にカルピスを持って行くように、って言われてさ」
あぁ、篤志が。
でも、なんでそんなことを？
「じゃ」
それだけ言うと山中君は学校に戻ろうとしたので、「ちょっと、待って」と呼びとめた。

ぎょっとした顔で、山中君が振り向く。
あぁ。
山中君は私に呼び止められて、とてもとても迷惑そうです。
でも、篤志が山中君をここへ寄こしたというのなら、いくら待っても篤志は出て来ないってことなんだろうと思うし。

「あの、これを篤志に渡してもらえますか？」
ごそごそと鞄から篤志のキーケースを取り出す。
「篤志、忘れて行って。今日はこれを届けに来たんだけれど」
そこまで言うと「あ、なるほど」って言って、山中君はキーケースを受け取ってくれた。
「篤志に渡すから」
山中君が、キーケースを持ち上げてそう言ってくれたので、私は「ありがとう」と急いで言った。

山中君が門に入るのを見届けると、ふぅと溜息が洩れた。
緊張していて、息をするのも忘れていたかのような大きな溜息。
すると、一連のことが済むのを待っていたかのように、メールの受信音が手のひらで響いた。
当然のことながら、篤志からだった。

＜鍵、ありがと。お礼はあれでいいでしょ＞

この絶妙のタイミング。

山中君が来る前じゃなくて、戻った直後っていうのが、かなりわざとらしい。

しかも。

お礼って、さ。

渡されたカルピスをじっと見る。

……もしかして、ばれてる？

双子のテレパシーって、あるのかも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0177s/

野球部員とその周辺のエトセトラ

2011年4月28日12時40分発行